JUDI
JAPAN URBAN DESIGN INSTITUTE
都市環境デザイン会議
東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル 〒113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

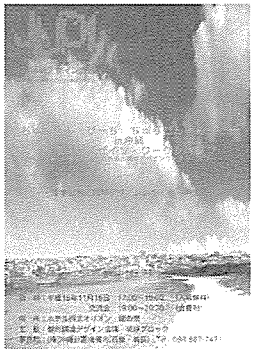
JUDI
075
20.NOVEMBER 2003
特集 ちゅむらん・びーち ちゅむらん めーさin 沖縄［都市環境デザイン・ワークショップ］
発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集：ちゅむらん・びーち ちゅむらん めーさ in 沖縄「都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ・ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ」
1．「都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ・ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ」…… 1
2．ちゅむらん・びーち ちゅむらん めーさﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ開催を終えて …… 7
3．沖縄の都市環境ﾃﾞｻﾞｲﾝについて…… 9
4．「沖縄らしさ」のグラデーション…… 9
5．首里の町並形成……10
6．おおらかで簡素な美的感覚……12
7．ゆいレールから望む沖縄……14
8．美しい庭園の島々……15
9．沖縄滞在記……16
10．琉球ブロックの誕生と……17
●連載コラム
「スパイシースペース」都心に展開される屋上緑化……19
●選挙管理委員会……20
●委員会活動報告……22
●事務局より……23

特集：ちゅむらん・びーち　ちゅむらん　めーさ in 沖縄［都市環境デザイン・ワークショップ］

都市環境デザイン会議の沖縄支部となる「琉球ブロック」が2003年7月に発足し、これを記念して、11月に「都市環境デザイン・ワークショップ」が開催された。当日は、JUDIの北海道ブロックから九州ブロック、琉球ブロックの幹事及び役員等（約30名）が全国から沖縄に集結。「沖縄の都市環境デザインの行方を考える」を基本テーマにして、活発な意見が交換された。今回のワークショップは、沖縄の都市環境デザインに関わる専門家との交流を中心に、沖縄の都市環境の行方を探ってゆくことを目的としている。沖縄の都市環境デザインの課題を議論しながら今後の取り組み方等について、考えてみたい。

日時：2003年11月15日
17：00～18：00
場所：西部オリオンホテル
主催：都市環境デザイン会議
琉球ブロック事務局
●司会／石嶺　一［(株)沖縄計画機構］
●ファシリテーター／八木健一［八木造景研究室］
●パネラー／新城和博［(有)ボーダーインク］／高嶺　晃［那覇市水道事業管理者水道局長、元那覇市都市計画部長］／江川直樹［(株)現代計画研究所］／高見公雄［日本都市総合計画所］



『ちゅむらん・びーち　ちゅむらん　めーさー』の「ちゅら」とは美しく清らかな、「むん」とはモノ、「びーち」とはbeachではなく、贔屓（びいき）という意味、「めーさー」とは、媚びへつらう者という意味の沖縄方言であると、司会の石嶺氏より説明があり、なごやかに会議が始まった。

■石嶺一（沖縄計画機構）

沖縄の都市環境を考える上で、欠かせないことに、観光、基地、交通があるが、『ちゅむらん・びーち　ちゅむらん　めーさー』という沖縄の言葉に乗せて沖縄の都市環境デザインを語りあいたいと考えている。沖縄には、この沖縄の言葉に表されているような独特の文化があり、『ちゅむらん・びーち　ちゅむらん　めーさー』つまり、美しい自然の恵みがある。キーワードとして風、土、空、すーじぐわぁー（路地）などを参考に考えていきたい。

■八木健一（八木造景研究室）

『都市環境デザイン会議』は「都市環境デザインのあるべき方向を探ろう」という呼びかけのもとに、関連分野の専門家たちが結集して１９９１年５月に発足し、我が国の都市環境の質的向上に向けて、様々な活動を展開してきました。昨年は新たに「琉球ブロック」が加わって、完全な全国組織となり、会員数は現在約４８０名です。

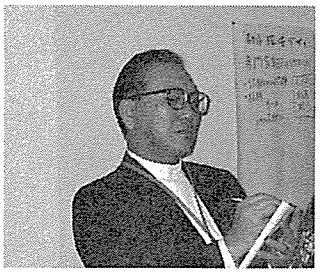
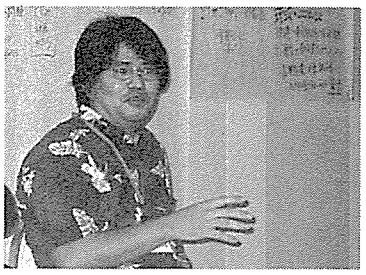
折しも、昨年７月に国土交通省から「美しい国づくり大綱」が発表されましたが、その前文の中で、「美しさは心のあり様とも深く結びついている。私達は社会資本の整備を目的ではなく手段であることをはっきり認識していたか？量的充足を追求するあまり、質の面でおろそかな部分がなかったか？等々率直に自らを省みる必要がある」と書かれています。このことは、まさに今、私たちが抱えている最も重要かつ緊急の課題ではないでしょうか。

「人が環境をつくり、環境が人をつくる」といわれますが、昨今の青少年犯罪の凶悪化をみるにつけ、生活環境や社会環境の悪化が、人びとの心の荒廃につながっていることは明白です。

「美とは、やすらぎである」というのは、かのサルトルの言葉ですが、美しい環境は、人の心を和ませ、平和な国を築く基本です。

都市環境の質的向上をめざす私たちは、「美しさ」という、極めて主観的な概念を普遍的なステージに乗せるために、様々な議論を重ねていますが、その原点は、まず、醜いもの、危険なもの、不要なものを、身の回りから無くすことではないかと考えています。電柱や醜い看板の類いを排除するだけでも、すっきりと美しい景観が蘇るようなケースは数多くあるでしょう。

決して復古主義ではありませんが、これからは、「足し算」ばかりでなく、「引き算

のデザイン」ということも考えて、もともと美しかった我が国独自の景観を再生させようではありませんか。

【パネリストの問題提起】

■ 新城和博 （ボーダーインク）

●言葉

・沖縄の大きな特徴の一つとして『言葉』がある。この言葉にこだわりながら編集の仕事を展開している。一般に言われるような沖縄は、青い海、青い空と基地だけではないことを外に向かって言っておきたい。

● 「ちゅら」における被害

・沖縄の言葉の一つである「ちゅら」は、NHKの朝ドラ「ちゅらさん」以降、沖縄内では、ちゅらに溢れかえってしまっている。何処をみても「ちゅら」「ちゅら」が氾濫しており、もうやめてほしいという意見も沖縄県内で出てきている。この現象は、外部からの沖縄のイメージが沖縄内部に植え付けられ沖縄内部がそれに応じている現象に過ぎない。

このことが、沖縄のイメれをチュラビーチと言ったりしているそのことに違和感を感じ、いたたまれないでいる。

「ちゅら拡散防止条約」の早期締結を提案したい。

●沖縄らしさ

・沖縄には、昔から村のなりたちのスタイルに森と御嶽（ウタキ）と集落によって一つの形が作られていた。また、集落の背後に森を配置することで、母が幼子を抱くように小さな村を守り囲んでいるという腰当（クサテ）の形を作ってきていた。さらに、個々の家々は、風水を取り入れられ「白浜ヤ前ナチ森ヤクサティーシー」といって、南の白浜を前に北側の裏手に森を配置した個所に家を建てなさいという言い伝えがあり沖縄の気候と自然と共存する集落の形があたりまえのようにあった（夏は涼しい南風を受けるために、家の玄関を南の白い砂浜に向け、冬は寒い北風を遮るために、森を家の後側に配置するという意味)。最近はそういうことを聞かなくなり、沖縄が見えにくくなった気がする。

・沖縄で暮らす私にとって沖縄の魅力や、沖縄のよさは、整理整頓というちゅら（「ちゅら」とは、本来「清らか」という意味がある）感覚よりは、ごちゃごちゃかげんに魅力を感じている。

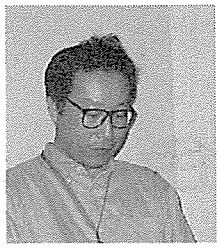
■高嶺　晃（前那覇市都市計画部長）

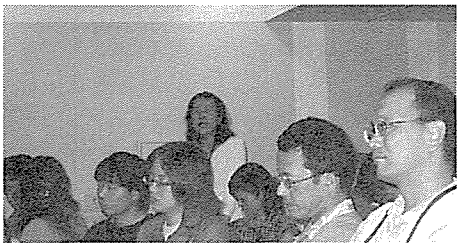
●沖縄の原風景

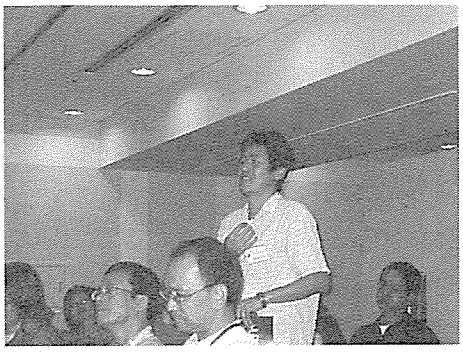
・沖縄では、琉球という言葉にこだわってきた。琉球の1000年の資産は、戦争で消失してしまった。戦後の27年間、米軍統治下に置かれた沖縄に対して、本土では昭和40年代からはじまった列島改造時に、沖縄には、本土との格差是正を行う為に、大量の生産を余儀なくされた。その量産体制では、風や光といった沖縄のメンタルな部分を度外視した短期集中形であり、それは、今も続いている。

●同化の文化

・沖縄は、その歴史の中で、中国等と交流した際に様々な文化を取り入れながら、独自の文化として形成してきた。その一つに大国中国に対し、小さな島を大きな大陸に見せるようにくねくね曲がった道や、長い橋、石畳等を作り演出してきた歴史がある。さらに、隣国文化を吸収し、琉球風に同化してきた。例えば、中国ならではの龍も、首里城にみられる龍頭等をみると中国のそれとは違い丸みを帯びたもっこりした形で







ある。全体が丸く、もともとのいかつい顔がひょうきんな顔に変化している。建物の屋根の「反り」などの表現も本来中国流であるならば、緊張感のある形を作っているが、沖縄の風土に合わせ琉球風の屋根の「反り」を持つデザインを完成させている。戦後、アメリカからコンクリートが入ってきたが、同化しながら沖縄らしさをつくってきている。

●那覇市の都市計画

・戦後の沖縄における都市計画の取組は、比較的早くから始まった。しかし、昭和53年に策定した総合計画では「景観」を初めて取り入れる事となったが、当時産業経済優先の考え方の中で、理解されず、反発がありずいぶん苦労を重ねた。沖縄の都市景観の中には、古くから、風水の考え方があり、風水の形をいかに都市計画にとりこむかを考えている。また、沖縄における都市景観を考えるにあたり琉球王朝、異文化の同化を無視する事ができない。さらにここで考えなければならないのが、本土との格差是正である。都市景観形成にあたり、メンタルな部分をどうとらえ、どのような形で地域に表現し、形成していくのかが最近の課題である。

■江川直樹（現代計画研究所）

・先月（11月3日）に、大邱都市デザイン研究会（ＤＵＤＩ）準備会等が主催する日韓国際シンポジウムに、都市環境デザイン会議（ＪＵＤＩ）関西ブロックのメンバーが参加した。「２１世紀　都市デザインの課題」というテーマで、専門知識と情報交換の場をもった。我々は、当初韓国の都市環境デザインというつもりだったが、彼らは、大邱の都市環境デザインにこだわった。JUDIのホームページを韓国語に翻訳し

ちゅらむん・びーち　ちゅらむん・めーさー
in Okinawa
都市環境デザイン・ワークショップ

次に挙げる　キーワードを参考に
沖縄の都市環境デザインについて　考えてみよう・・・

太陽　風　月　星　光　陰　音

空　海　波　川　土　畑

祈り　神　魂　気

樹　緑　花

芸　色　味　食

香り　季節

まち　道　スージ小　人　集

今　昔　未来　時

観光　基地　交通　動

て発信している。

●キーワードに関連して

・沖縄には、我々は、台風のイメージがある。沖縄にとってのキーワードは、神単体ではなく神々という印象をもっている。それと特徴的な防風林が沖縄を語る上でのキーワードとしてふさわしいと考える。

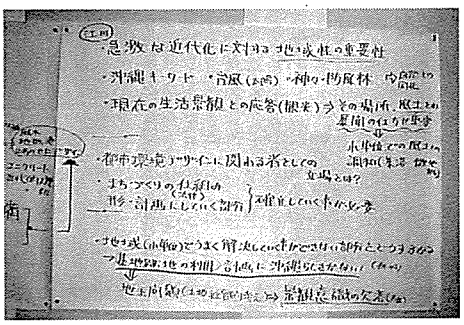
・沖縄の観光というキーワードを考えると、自然への応答が生活文化の中で魅力的に表現されているところにある。今の場所を自然の中にどう展開していくかが重要であると考える。

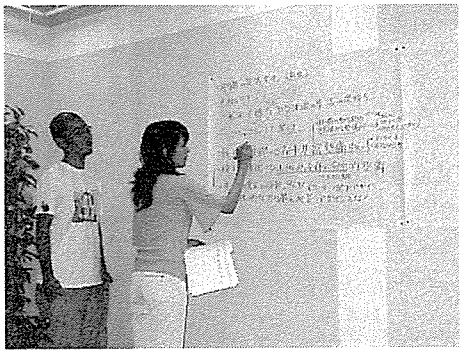
●沖縄らしさ

・沖縄が早期に復興したのは風土とのつきあい方を知っていたからではないか。都市を計画するに当っては、微地形が重要であると考える。沖縄にもいろいろな場所があり、単純に沖縄らしい居場所などという形でくくらないでほしいと考えている。それは我々も神戸らしさ西宮らしさとかいうが、本当に西宮らしさとはなにかと言われると困ってしまうからである。微地形の小さな単位、その単位の中での風土とのつき合い方みたいなものが、集合して、その地域らしさが形成されているのではないか。つまり、集積の形を〝らしさ〟と捉えるのではなく小さな単位での〝らしさ〟を〝土地なり〟という考えで捉えてはどうか。

代表的には、その微地形が単位単位で応答していく事がその土地なりの〝らしさ〟をかたちづくっていくと考える。それと同時に「集積集落の美しさは、何故美しいのか」、じっくり皆で考えてみたいと思う。

・風土とのつき合い方が景観の中に現れているもの＝「沖縄らしさ」ではないか。





■高見公雄（日本都市総合計画所）

●都市環境デザイン

・『都市環境デザイン会議』設立草創期の話として、実は、都市環境デザインという言葉は我々の造語であった。都市環境デザイン会議ができた当時、アーバンデザイン、都市デザインという言葉はあったが、どれも、中途半端な印象があり、その中に「環境」を入れたとたん、我々が目指す形として収まったのである。我々の目標は、都市環境デザインの専門家集団である。我々は一体何者なのか。これは、実際、実務上で起きている様々な問題解決の糸口にもなっていた。仕組み、計画、形にする部分を同時にやっていく集団が『都市環境デザイン会議』のメンバーである。

●問題提起

・都市環境デザインで何を議論するか。できあがってきたものの背景、デザインを議論したい。

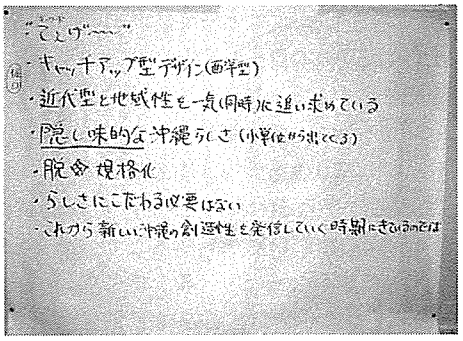
【　討　議　】

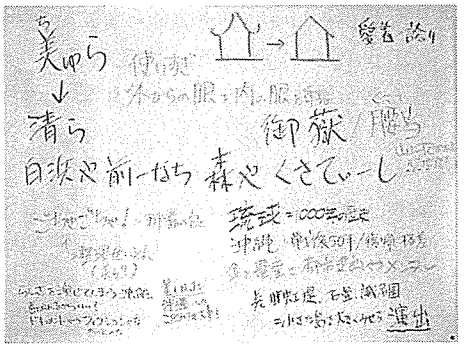
●住民参加

・最近は、NPOやワークショップの勢いが強い。誘導する人たちはボランティアでやっているが、実際、興味で仕事をされるのはこわい。それを隠れ蓑にして進める人もいるが、専門性を出していく必要がある。（高嶺　晃）

・住民参加の中で、「我々は、一体何者なのか？」という高見さんの意見をどう解釈すればいいのだろうか？（石嶺）

・JUDIができたときとは、状況がかなり変わってきた。例えば住民と行政の間に入





って、両者を結びつけるソフトウェア的な役割が想定できる。（高見）

・管理面等では、住民が入ることによって、できることがある。NPOなどの団体の使い方によるのではないか。（江川）

●沖縄らしさ

・小さい単位で考えていこうということには同感。復帰したときに比べて、ごちゃごちゃしてきた。取り返しのつかなくなった部分をどうすれば良いのか。（新城）

・基地の跡は何にしていくのか（新城）

・過去のことを考えるのも重要だが、これからどういう風に変えるかが重要だろう。（江川）

・沖縄らしさは決めるべきか。それに自分をあてはめてしまうのはだめだ。オーケストラの音色みたいで、集めているとメロディーになっているのが倉敷である。江戸時代の町並みがまとまっているのが、倉敷である。「らしさ」はあまり考える必要があるのか。みんなの心の中に「らしさ」があれば良いのではないか。観光とは、土地の良いところを見せるのが観光だと聞いたことがある。自分が良いと思ったところを見せれば良い。四国からきた生徒に倉敷の感想で、違和感、奇妙さが好きだという言葉を書いてもらったことがある。何もかもがが調和するのではなく、違和感が好きになることもある。かくし味のように、ズレは、現代に生きる人にとって、重要ではないか。（長沼）

・沖縄は、日本の中で「らしさ」を最も求められている地域ではないか。外部の人の求める「らしさ」に沖縄の人が乗っかっている面があるのではないか。27年間アメリカ統治下にあった沖縄が日本になりたかった時代背景がそこにある。沖縄の事実をどう伝えるか。新しいものをつくっていく必要がある。（新城）

・美しいもの、愛でるものが重要であり、ものづくりに対して参加型の手法をとりいれていけば良い。沖縄らしさを色彩にたとえるとコーラルホワイトといったところである。（沖縄／川嶋　アトリエ首里）

・生活からくる「らしさ」を掘り起こす方法が良いのではないか。新都心では、商業地がパーキングなどの低密度に利用され、住宅地では逆に高層化し、高密度になっている。（新城）

・脱規格をめざしたい。商業製品はすべて規格でできており、規格でないものをつくるのが専門家の役割である。公園などのワークショップでは、本土のメーカー等からいろいろな意見がでてくる。しかし、本当の幸せを得るには、規格でないものをつくることではないか。規格をつくらないものをつくるのは大変だ（インタープラン沖縄・佐藤）

・そういう例はいっぱいある。そういう情報交換をしたい。悪い見本もいっぱいある。（江川）

・統一感がないのは、活気のある経済性をあらわしているのではないか。それが沖縄らしを出している。「らしさ」を捨てるのではなく、どこかで意識し、普通に生きていきたい。（琉球ブロック／福島　）

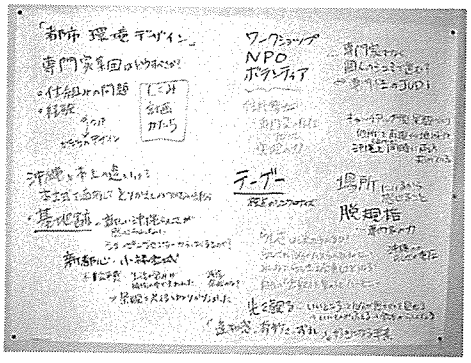
●新都心

・那覇新都心は、米軍基地を開放した跡に形成された街である。都市デザインの良いまができるはずだったが。「沖縄らしさ」がない。なぜ、そうなのか。（石嶺）

・都心は、108ha、93%が私有地、7%が公有地である。2,200人の地主がいたが、開発にして、軍用地として接収されてきたという不公平感と減歩で30%以上の土地を失うということで、地主の要求がいろいろと強かった地主に納得してもらうのは、根気のいる仕事だった。このため、都市デザインの面から50年、100年後、どのようになるのか等、考える余裕がなかった。（高嶺）

・新都心に関しては8年ぐらいかかわってきた。できて3年ぐらいでは村のようにはならない。もっと長い目で見る必要がある。今の時点では評価できない。（堀口）

・本州の都市環境デザインはキャッチアップ型だった。西洋やアメリカの美しい場所



をコピーして作りつづけられている。できれば沖縄ではそのようなことがないようにと考える。JUDIのメンバーは、集落好き、市場好きが多く、バブルの頃は、すぐにアメリカやフランスに行って、マリーナなどの写真を撮ってきて、計画に取り入れてきた。西洋の風景をコピーしようという風潮があった。（堀口）

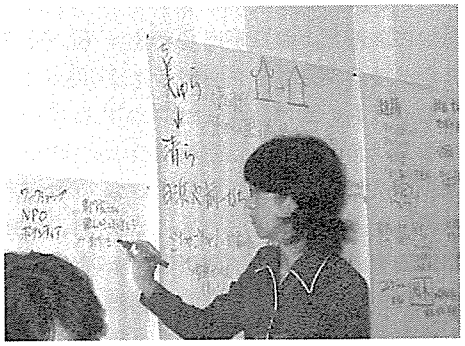
・本州の高度経済成長の波に遅れてきたため、近代化と地域性を一気に求めているのが今の新都心の景観ではないか。（堀口）

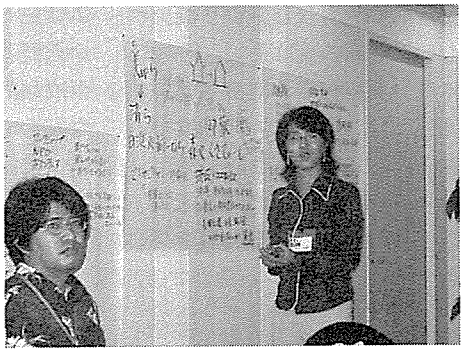
・愛着があって、誇りに思えることすべて、"私の場所"が"らしい"とう事ではないか。

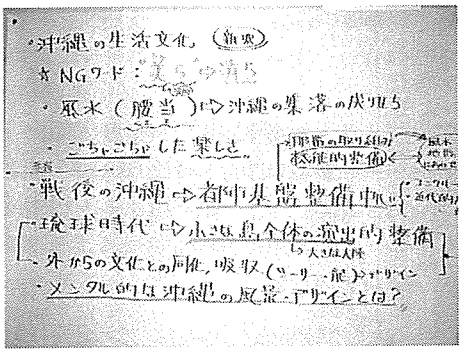
・具体的なものとして、先進事例があるが、そういうものをつくって一体何なのか。

また、変なものにならなかった事例は本州にいくつもあるのではないか。沖縄らしさでは、青や、赤などのはっきりしているもの以外に、実はもっとほかにもあるのではないか。（八木）

・新都心については、もう少しロングタームでみてほしい。（堀口）







特集

ちゅらむん・びーち ちゅらむん・めーさー ワークショップ開催を終えて

石嶺　一
ISHIMINE　HAJIME
（株）沖縄計画機構
琉球ブロック幹事

2003年11月15日（土）午後5時。JUDI設立から約12年、10番目のブロックとして設置された琉球ブロックが初めて主催する記念すべきワークショップの幕が上がった。琉球ブロックのメンバー約10名は一様に表情が硬かった。

UDIの代表幹事会からは琉球ブロック設立を認めるには、10名以上の新規加入者確保がミッションとして与えられた。私が仕事その他を通じて勧誘できる人材には当然限界があった。ましてやJUDIそのものの存在とその支部を沖縄に立ち上げる意義からそれぞれに説き伏せることから始めなければならなかったから大変だった。しかし、なんとか新生・琉球ブロックをスタートさせるにふさわしいメンバーが約10名揃った。その結果、琉球ブロック設立記念事業として今回のワークショップを開催することが出来た。

いよいよだ。ワークショップの開会を宣言した。「それでは、ちゅらむん・びーち、ちゅらむん・めーさー　in沖縄　都市環境デザインワークショップを開催します！」

「ちゅら」とは美しく清らかな、「むん」とはモノ、「びーち」とはbeachではなく、贔屓（びいき）という意味、「めーさー」とは、媚びへつらう者という意味の沖縄方言であるが、私の造語的表現だ。ワークショップのテーマを設定する際、琉球ブロックのメンバーで何度かミーティングを行った。いくつか具体的なテーマ案が挙げられたが、琉球ブロックのメンバー自体がJUDIのことをよく知らないこと、ワークショップを通して全国ブロック幹事の面々からJUDIの活動内容等を聞き出し、今後の琉球ブロックの活動テーマをいくつか見つける機会にしようということで、「沖縄の都市環境デザインの行方を考える・・・」という漠然としたテーマを設定することになった。しかし、一般参加者へ参加を呼びかけるには少々遊び心が必要だ。テーマはそれとして、キャッチコピー的タイトルを考えることにした。

それが、「ちゅらむん・びーち、ちゅらむん・めーさー」だった。意訳すると「美しいもの贔屓、美しいもの好きのためのワークショップ」という感じだ。

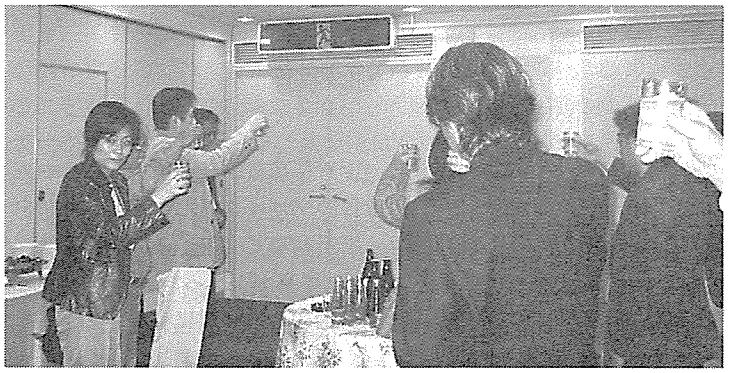
ワークショップは沖縄在住のゲストパネ

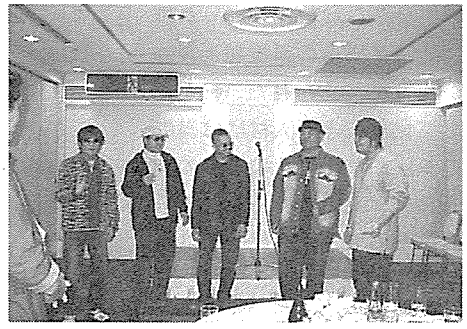
第１ラウンド終了、採点はアドバンテージ琉球ブロックだったはずだ。

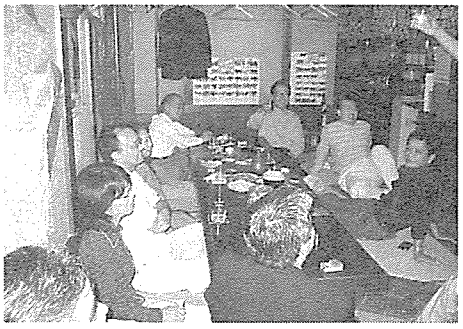
第２ラウンドは、興奮冷めやらぬまま交流会というかたちで、すぐに始まった。これがまた、予想以上に盛り上がった。単なるスピーチを挟んだ立食パーティーにしては芸がないので、アマチュアだが本気でプロを志すアカペラ・グループのパフォーマンスを会の真ん中に入れた。曲目が増すごとに、みんなの頬がゆるみ、グラスを持ったままテンポを取る者もいれば、踊り出す者もいた。みんなノリノリだった。そんな光景を見て私はオンザロックの泡盛を喉に流し込みながら思った。

あっという間に第２ラウンド終了のゴングがなった。興奮はまだ冷めるどころか増していた。その年の８月に都市モノレールは開通したが、終電の時間などという概念はこの島にはない。沖縄の夜は長い。約30名がタクシーに分乗し、ある沖縄料理の居酒屋へと場所を変えて第３ラウンドは始まった。単に他愛のない話で盛り上がるという様子ではなく、一様にJUDIのことに関して、真剣に語り合いながら泡盛を酌み交わしていった。席が次々入れ替わりながらJUDIについて意見と泡盛が交わされた。みんな心地よく酔っていた。代表幹事の八木さんが大きな声で歌って拍手喝采を浴びていた。第２、第３ラウンドの採点も琉球ブロックのアドバンテージだった。JUDIの幹事、代表幹事のほとんどがこう話していた。「久しぶりにJUDIについて原点に帰って議論が出来た。琉球ブロックを設立できてよかった。琉球ブロックから今後、JUDIに対していろいろ発信してもらいたい。」

準備が大変でかなり苦労した全国ブロック幹事会in沖縄であったが、やってよかった。JUDI琉球ブロックを立ち上げてよかったと心から思った瞬間でもあった。翌日はバスによるエクスカーションが控え、バスガイド役も担う私は、第３ラウンドでゲームオーバー。時計の針は午前１時を過ぎていただろうか。一行はホテルに戻って第４ラウンドを明け方まで楽しんだようである。なんとも、飲み方が実に沖縄っぽい面々であった。来年の全国ブロック幹事会への参加が今から楽しみだ。







沖縄の都市環境デザインについて

翁長秀正
Onaga　Hidemasa
（株）沖縄計画機構

昨年11月に行われた、琉球ブロック設立記念ワークショップに全国から参加いただきありがとうございました。「沖縄らしさ」をテーマいろいろな意見を聞き刺激になりました。

当初、私は都市環境デザイン会議の趣旨を「良いデザインというものを示して、それを広めていくこと」と考えており、これはすごく大変なことだ、本当にやれるのかと戸惑いを感じていました。しかし、懇談会で「まずはネットワークづくりと互いの意見交換から始めればいい」と言われ少し気が楽になった反面、目標とか目的達成の道筋が見えないままにいます。

その答えをだすためにも、琉球ブロックの活動を維持することが大切で、今回の公募制プロジェクト当選を機に、県内外の多くの方々との活発な交流が生まれればと思います。

●特徴的な建築形態にみる沖縄建築の基本スタンス

沖縄の伝統的建築物は木造赤瓦屋根であるが、これらの建造物は先の戦争で一掃され、沖縄建築の歴史的敬称は（一般建築において）途絶えてしまったと思う。戦後、アメリカが持ち込んだ建築様式（２×４やRC造）が一気に広がり沖縄の風景は一変し、その中で、人々は生活スタイルに合わせて特徴的な建築形態をつくりあげてきた。その代表的なものが、角だし住宅、ピロティ式住宅、花ブロック、水タンクなどである。これらは、人々の夢の実現（将来２階を増築する）や生活の利便性、快適性を確保（駐車場の確保、日差しを和らげる、水不足への対処）する上で必要不可欠なものとして創造され、近年はデザイン的な配慮（花ブロックや水タンクのデザイン化、斜め梁など）も見られる。

建物や都市のデザインにおいて、まず安全性や機能性、快適性を確保したうえで意匠があるべきで、全ての人がその権利をえるためにもユニバーサルデザインの普及が重要であると思う。

●沖縄において評価される空間

沖縄で良い事例として評価されるものに、備瀬集落や那覇市の公設市場周辺があげられる。前者はフク木の防風林に囲まれた伝統的な集落で、後者は公設市場を核に数坪単位の小さな店が何軒も並び、アジア的な雰囲気を持った賑わいと迷路のような界隈性のある商業地である。

備瀬集落は伝統的な集落のたたずまいとしての美しさがあり、市場には賑わいや活気など人の活動を介した空間的魅力がある。視覚的に捉えられないこれらの要素は、都市環境デザインの大切な視点ではないだろうか。

沖縄の建築は、伝統を継承するという機会はうばわれたが、新しい環境の中で独自のスタイルを創り出すという文化を持っており、これが沖縄の都市環境デザインを考える基本的なスタンスになるのではないかと思う。

〔都市計画によるコントロールの必要性〕

都市デザインを誘導する手法として、地区計画や風致地区などの都市計画法制度が活用されている。これらは限られた特定の地区を対象としており、一般の市街地においても十分な規制力を持った制度の強化が必要に思う。

現在、進められている景観基本法の策定や観光立国に向けた国取り組みはその追い風になっている。都市環境デザイン会議として何らかの提案ができるのだろうか。

「沖縄らしさ」のグラデーション

新城和博
KAZUHIRO SHINJYO
（有）ボーダーインク

那覇の街を俯瞰することが出来る沖縄都市モノレール「ゆいレール」に乗って、僕は「ちゅむらん・びーち　ちゅむらんめーさin沖縄　都市環境デザイン・ワークショップ」の会場に出かけた。ゆいレールは那覇のもっとも高台にある、

かつて王府があった首里から下って、ばりばり開発中の天久新都心「おもろ町」をかすめて、那覇の中心街を通り抜けて、漫湖を越えて、那覇空港に至る。現時点での、もっとも新しい那覇のシンボルだろう。

しかし、都市デザインか。ため息つきつつ、牧志駅を下りて会場の、国際通りのホテルの地下の会場へと向かった。ため息の原因は、「都市デザイン」なんて、語れば語るほどむなしくなるテーマということ……。沖縄で都市デザインなんて言ったって、その前に島のど真ん中に居座る、日米安全保障条約に基づくところの、広々とした米軍基地を横目にしなくちゃならないのだから、冗談きついぜ……。

シンポが終わってしばらくとぅるばった後に考えてみたら、戦後の沖縄島における都市デザインとは、つまり返還された米軍

基地跡地利用なのである。

ゆいレールが横切ることなかった、那覇の新都心とされる「おもろ町」だって、戦後、那覇市の四分の一ほどの土地を広々と占拠していた米軍のハウスエリアだったのだが、約二十年前に返還されたところだし、もっと前に遡れば、沖縄戦では「地獄の底」とまで言われた、日米両軍が血みどろの肉弾戦を繰り広げた戦場でもあった。その象徴が「シュガーローブ」と呼ばれた小高い丘である。もともとは「慶良間ちーじ」と呼ばれていたらしい。

つまり、那覇沖合に浮かぶ慶良間諸島が見渡せる丘、という意味だ。

ぼくは開発が始まる前の、フェンスに囲まれていた頃の、「天久解放地」(開放地ともいうが)に何度か忍びこんだことがある。その頃は米軍の建物も撤去されて、(那覇にしては)広大な草原と森が広がっていた。そこで僕たちは車やバイクを乗り回したり、ブーメランをとばしたりして遊んでた。黙認解放地だったのだ。友だちのひとりは、古くて巨大な墓の発掘作業のバイトをしていたっけ。工事のおじさんたちがよくハブを捕まえては売り飛ばして、ビール代にしていたと笑っていた。泉にはたくさんの野鳥がやってきていた。

そうした土地の脈略をまったく感じさせないように、まるで何もなかったかのように、白紙の上に描かれて登場してきた「天久新都心」の街並みを横目に、ゆいレールが通りすぎるこの島に住んでいて、都市デザインについて語る僕は、いつかバチあたるかも。こんな時、結局とらわれてしまうテーマは、「沖縄らしさ」である。

気がつけば、ここんところ沖縄は、ずっと、「らしさ」を求められてきたように思う。でも僕はすぐに気づいていた。「らしさ」を考えるなんて、「らしく」ない。でも……「らしさ」を求める視線はかなり強力で、知らず知らずのうちに「らしく」ふるまっている沖縄の姿にため息したりして。

でも今はこう思うことにした。「らしさ」を考えるということは、青から緑までのグラデーションの全ての淡い、その全体を見渡す、その姿勢だ。「これが沖縄」でも、「これも沖縄」でもない。グラデーションの一部を凝視するのではなく、その全体像を俯瞰する感じ。例えばモノレールに乗って、黄昏れていく那覇の街を流れるように眺めること。その全体を見つめ直そうとする態度が、僕の「沖縄らしさ」なのではないだろうか。

古墓群から沖縄戦、米軍施設から解放地、そして都市再開発へ。そのグラデーションの全てを感じとるために必要なことはなんだろう。きわめて曖昧に表現すれば、そこで生き続けること、ではないだろうか。生まれて、生きて、死ぬという、僕自身のグラデーションと重ねあわせられた時、それなりの、いや僕なりの那覇における「都市デザイン」論が話せるかもしれない。

首里の町並形成

福島　清
FUKUSHIMA　KIYOSHI
(株)国建　地域計画部

■城下町・首里の誕生

沖縄では15世紀初め、首里城を拠点とする琉球王国が誕生し、城の外苑に人工池・龍潭を浚渫し、大手通りには中山門を創建するなど、城周辺を整えながら王国としての威容を備えていった。16世紀初めには、王府はそれまで各地方に住んでいた按司(あじ)と呼ばれる首長を首里に移住させ、王国の体制を強化した。この頃から、首里の町は城下町としの発展が始まったものと考えられる。

18世紀初めに制作された『首里古地図』は6畳ほどの大きさがあり、各戸の区画や所有者、建物名が記されており、当時の町の様子を知る上で貴重である。この地図によれば、戸数はおよそ1150軒、人口は1万5千人程度と推定されている。18世紀初めの琉球王国の総人口がおよそ15万人であることから、総人口の約1割が首里に住んでいたことになり、当時の都市部の中でも一大都市であったことがわかる。明治10年には戸数3456戸、人口4万5千人ほどになり、戸数、人口共におよそ170年間で3倍に膨張したことになる。しかし、明治12年の廃藩置県(琉球処分)により沖縄県が設置されたため、王国時代は幕を閉じ、都市の活気は次第に那覇へと移ってゆく。

■戦前の首里の町並

明治末期から戦前にかけて、首里の町を撮影した写真が幾つか残っている。これらの写真では比較的高い石垣が屋敷を囲み、

瓦葺や茅葺の平屋建物が軒を連ねていた。道路の多くは石畳が良く残っており、石垣を覆うツタ類や豊かな樹木がひときわ歴史ある首里の町の特徴を醸し出している。また、首里には王国時代に造られた社寺建築や御嶽と称される石造の拝所、見事な彫刻が施された石橋なども多く、王都の面影を良く留めていた。しかし、沖縄戦では首里城地下に日本軍の司令部壕があったため、爆撃などにより町は壊滅的な打撃を被った。

戦後の首里は土地の細分化によって家屋が密集し、周辺の田畑が住宅街として変貌していった。また、那覇に較べて道路の整備が遅れたため、いまだにかつての面影を残す細街路が多い町である。

■「龍潭通り」の景観づくり

首里鳥堀交差点から西に向かって伸び、首里高校に至る道路は「龍潭通り」と称され、現在道路の拡幅計画に伴い建物の建て替えが始まっている。龍潭通りは首里地域では賑わいのある中心的な通りで、龍潭越しに首里城を眺める眺望ポイントもある。また、今年開通したモノレール駅から首里城公園へのアプローチ道路にもなっているため、最近は観光客の通行も増えている。那覇市ではかねてからこの地域を歴史的な景観を現代に活かすゾーンとして景観形成づくりを住民と共に進めてきており、昨年12月には「都市景観形成基準」を施行させた。道路沿いは用途地域上では近隣商業であり高さの制限が無いが、この基準では建物高さは軒高12m以下、絶対高さ15m以下、0.9m以上の壁面後退、色彩や意匠の望ましい方向、さらに敷地境界や付属物、緑化などについて細かい基準を設定した。城下町としての歴史を活かしたまちづくりへ向け、首里のまちが新たな動きを始めている。明確なテーマを持った沖縄のまちづくりに、これからも注目してゆきたい。

山城饅頭

住宅石垣

首里駅付近

建替え建物

龍潭越しの首里城

福島龍潭通り

おおらかで簡素な美的感覚

木下能里子
KINOSHITA　NORIKO
（株）なむ環境創造

大阪から那覇に移住して３年半になる。同じ頃やはり大阪から移住した友人がいみじくも言ったことだが、良いにつけ悪いにつけ、沖縄のデザインは大味だ。

たとえば大衆食堂の料理。食堂ではおかずだけ注文するとご飯とみそ汁がついてくるのだが、付け合わせなどはなく、１品のみが豪快に山盛りされるのがスタンダードだ。刺身だって、つまがつくようになったのは最近の流行からだと聞く。市場の商品レイアウトだってそうだ。とにかくすきまなく品物を並べる、そのボリュームがなんともいえない迫力と土着感を生み出している。

大味な感覚は、まちなみにも見ることができる。今その辺で見られる一般的な民家のつくりは、単なるコンクリートブロックの箱という形が一番多い。これに必要なものを屈託なくくっつけていく。代表的なのは外階段と屋上の水タンクだ。壁の色は適当に塗る。ここにはアメリカの影響もあるが、感心するほど無邪気な水色や黄色やピンクなどが使われたりする。店の商号はペンキで壁に書く。店をやめても文字は急いで消したりしない。さすがに最近は見られなくなったが、一昔前は将来二階という、陸屋根の上にいつか柱となる部分として鉄筋だけが何本も飛び出している建物もよくあった。見かけなんかより実用第一なのだ。最近は皆デザインを意識するようになって、新築のときはたいていもっと凝った建物にするけれど、基本的な志向が大味なところがどこか残っていて、凝りすぎた装飾と大味な基本プランがアンバランスな例は数多くみられる。

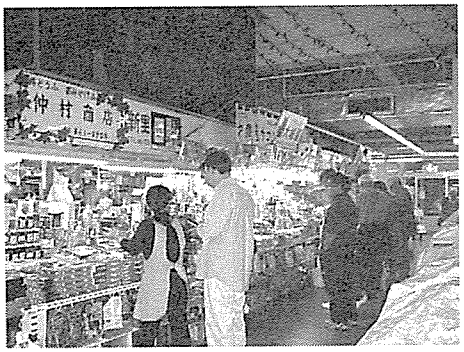
ストレートな感覚と「デザイン」への努力がミスマッチした例は公共施設にも少なくない。今はなき宮古島の旧空港など、ターミナルビルそのものが花笠のかたちをしていた。私は最初あまりのストレートさに驚きすぎて直視できなかったものである。この手の「地元のモチーフを模す」施設はけっこう多く、観光沖縄の名を落とすのではないかと思われる安直なデザインが横行している。

こうした大味さは、良いも悪いも含めてそれこそ沖縄の「味」でもある。ちょっとだけ過去に属する、少し古びた路地裏の空気、地に足のついた生活感、ストレートで濃い人間関係。一方で、理知的なおしゃれなデザインも増えてきた。要素を制御しながら品良く並べ、美しく演出し、無邪気な自己をさらけださないよう気を配る。それは都会的なライフスタイルにとっては必要なことなのだろう。けれど、沖縄らしい味わいもすこしずつ薄れている。

沖縄のよさを生かして、バランスの取れた美しいデザインをするにはどうすればいいのだろう。

歴史文化遺産にはそのヒントが隠されているような気がする。大味といってしまってはなんだけれど、根底には通じるものがあるといえないだろうか。たとえば識名園は首里王府の離宮だが、建物も庭園も実にあっさりしたデザインだ。すっきりと簡素な品格がある。グスクや御嶽の石積みも、首里城など特別なものを除けば実にシンプルである。石積みがつくる内部空間もすきまだらけだったりして、どこからどこまでが何なのかも曖昧で、観光客などは拍子抜けすることもあろうと思われるほどだ。でもそれが、かみしめると実に味わい深い空間なのである。

こうしたおおらかで簡素な美的感覚、自我を防衛するよりは解き放つ場所の感覚はとても沖縄らしく思える。そんな味わいを新しい都市デザインに生かしていけたらと思うのである。



公設市場

識名園

特集

神々の深き欲望

江川　直樹
EGAWA　NAOKI
（株）現代計画研究所・大阪

フォーラムで渡された、沖縄の都市環境デザインを考えるためのキーワード集。「神」はあったが、私が思ったのは「神々」。そう「神々の深き欲望」だ。１９６８年今村、昌平監督作、日活配給。「原始信仰に生きる南の孤島を舞台に、ねじ伏せるようなタッチで日本人の共同体意識を掘り起こそうとした今村イズムの集大成。助演の嵐寛寿郎をして「ほんまの地獄」と言わしめた南大東島での苛酷な長期ロケを通じて、監督の想念のなかに生まれた独自の「沖縄」が創り出された。また、「野性」を体現する沖山秀子の登場も型破りなものであった。」（東京国立近代美術館フィルムセンター）

「原始的な農耕を営み、土俗信仰が生きている現代（当時）の南の島を舞台に、文明と土着的な人間性との相克、生と性の葛藤を人間群像の中に描き出すイマヘイ入魂の大作。前述のように、『にっぽん昆虫記』以前に書かれた自作戯曲が原型となっており、8年の歳月を経て原点に回帰した。60年代今村作品の集大成ともいえる作品。」（吉田武志）「ウチナーンチュを演じたヤマトンチュで、名実ともに大スターと呼ばれたのは、この人ぐらいではないだろうか。・・・

戦前、戦中、戦後を通してスクリーンの第一線で活躍し、張った主役は数知れず。三世代にも渡る息の長い人気を保ち続けるスターの中のスター。それがアラカンの愛称で親しまれた嵐寛寿郎である。・・・離島に住むある一族の家長という設定で、たそがれた古老の役を三線片手に、飄々と演じた。最初。この役をふられたとき、あまりにもワキ役過ぎて、乗り気ではなかったと語るアラカン。実際、撮影現場では、「アンタは主役じゃないんだから、いちいちカメラを意識した芝居はするな！」というようなことを今村監督に言われて、スターとしての面目をつぶされまくったらしい。だが、そんなアラカンの不満とは裏腹に、この作品での彼の演技は高く評価され、ブルーリボン助演男優賞なるものを獲得。この経験を機に、役者として一皮むけたと、後にアラカンは述懐している。・・・

アラカン本人も、『神々の深き欲望』を通して体験した沖縄の自然と音楽が気に入ったらしく、「島唄というのは、哀れが深くてよろしいなぁ。石垣島も美しく、青い海が忘れられへん」と語っている。憧れのスターであったアラカンが称える沖縄の魅力。それは筆者にとって見落としがちアラカンを通して再確認するものともいえる。ウチナーンチュを演じるヤマトンチュの中には不自然な輩も多いが、しっかりとした技量を持つ役者が演じれば、それは鏡像となり、ウチナーンチュとは何者か？という疑問にヒントを与える存在に成り得るのではなかろうか。」（上原耕作）

「右に黒澤明がいて、左に今村昌平がいる。」昭和30年代の映画全盛期の洗礼を受けた僕は、ごく自然にそう思っていた。娯楽映画中心の黒澤明監督を＜右＞、テーマ主義の今村昌平監督を＜左＞とはちと座りが良すぎるかも知れないが、僕だけでなく日本映画界全体がそういう雰囲気だったのではないだろうか。＜黒澤天皇＞、＜教祖今村＞あるいは＜鬼の今平＞と云う二人の尊称もしっかり定着していた。「赤ひげ」「神々の深き欲望」以降は特にそうだったような気がする。その＜鬼の今平＞に初めて会った日のことは、今でも良く覚えている。

「どうしてお前たちは学校に何も文句を云わないのだ？！」＜鬼の今平＞の第一声は忘れもしない、この言葉だ。・・・

「この人は何を云っているのだ？！」学校創始者である学院長が学校に文句を云え、と挑発しているのだ。まだ50代にはなっていなかったはずの今村監督の容貌は精悍で、まさに＜鬼の今平＞そのものだった。」（細野辰興）「真面目に考えれば、22歳の時、『神々の深き欲望』今村組の土方労働から始まった自分の「映画人生」トータルを『総括』する作業に・・・映画を作る原動力になるのは、「人間の情念・夢＝欲望」だと思います。岡本太郎ふうに言えば「映画は欲望 だ！！」です。問題は「誰の」欲望なのか？ということですが。・・・「飢えた者の欲望」が如何に強いか・・・」（長谷川和彦）

そう、世の中に、街を美しくしたいという「飢えた欲望」を持った人たちが一体どれほどいるのだろうか？経済至上主義を声高に叫んでいる限り、そんなものはありはしない。声に出して、「僕が美しい日本にする」と言い続けていると、思い続けていると、努力し続けていると、実現するというのが山崎正史（立命館大、ＪＵＤＩ会員）氏の言ではあるが、これは、そう簡単なことではないぞ、各々方！我銘肝！

特集

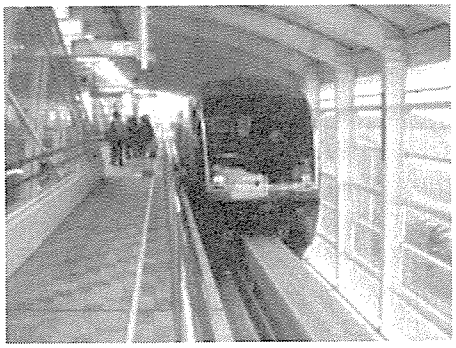
ゆいレールから望む沖縄
一目に良かったのか、心に良かったのか―

高見公雄
TAKAMI　KIMIO
（株）日本都市総合研究所

ブロック幹事の石嶺さんがこだわられた、「琉球」の名を持つ都市環境デザイン会議の10番目のブロックが発足した。2003年11月15日の全国ブロック幹事会には、全国より代表幹事及びブロック幹事が那覇を訪れた。

基本的に木造建築が皆無に近い市街地。大都市でありながら起伏の激しい地形。関東と同種は無いのではないかとまで見える植物類。従来は幹線道路を走る自動車の車窓から見ていたこの町の風景が、高架の特殊街路から一望できる。那覇都市モノレール「ゆいレール」である。きちんとした資料も見ず、開通したことだけを記憶に沖縄那覇空港に降り立ち、モノレール駅に向かう。東京モノレール等と同種のシステムである跨座式の車両は、丸みを帯びたデザインで、２輌連結のためあっけない位短いが、結構かわいい。通常この種の新交通システムは、開業してもなかなか利用者が伸びず苦戦している例が多いので、そんなもんだと思っていた。

モノレールは空港駅を出た後、返還軍用地の区画整理（109ha）が2005年には完了する小禄金城の市街地へ迂回しながら、那覇市の中心に至り、北上して、やはり返還地のまちづくりが進む那覇新都心を経由して、首里までの12.9kmを約27分で走る。



２輌連結で半円形のような側面

花レンガで飾った白い建物が、薄茶色の土、濃い緑の大地に浮かぶ、実に独特な都市景観が眺望できる。確かに、県庁周辺や国道58号沿いのビル等は、特徴の少ない形態をしているかも知れないが、強風に耐える堅牢な構造、屋上には水道タンクといった、気候条件に適合した住宅による市街地は、沖縄の、というよりも、那覇の景観と言うべきか。時間がゆっくりと流れるこの国を、真新しいモノレールがゆっくりと走る。

長いことバスしか乗り合いの公共交通が無かったこの島の上で、電車は受け入れられるのだろうかとずっと思っていた。ところが、最初ゆったりと腰掛けていた、長いベンチ式の車両は、空港駅を出る頃にはほぼ満席となり、次第に座を送り、定員着座の状態になる。途中駅でもかなりの乗降があり、モノレールは盛んに利用され、結構混んでいるのである。Judiのメンバーより後から乗り込んできた、20歳前後位の年代で、なぜかみんなスーツを着た若者５～６名もきちんと腰掛けていたが、もぞもぞと話し込んでいる。「おい、立つか」みんなで一斉に立ち、後から乗り込んできた壮年の観光客に席を譲ってしまった。東京でも見ない訳ではないが、電車ができたばかりの那覇で、譲り方もぎこちなく、譲った若者達の姿もらしくない。この出来事に見入ってしまい、後から思い出し、考え込んだ。

独自の文化、厳しい気候条件を含む風土を持ち、温かい空気とゆっくりとした時間、独特な都市景観と暮らし方。目に入るもの全てについて、十分にこの国は「らしい」ではないか、とうらやましく思ったブロック幹事会・フォーラム行であった。良い都市環境デザインは、風土、暮らし、そして心に拠るのではないかと。

時間はあくまでもゆっくり（本島中部備瀬のフクギ並木にて）

特集

横川　昇二
YOKOKAWA　SYOUJI
横川環境デザイン事務所

琉球ブロック設立を機会に開催された沖縄での全国ブロック幹事会、まず、地元関係者の方々に心よりお礼を申し上げたい。

1日目の全国ブロック幹事会が終わり、「ちゅらむん・びーち　ちゅらむん・めーさー　in　Okinawa」と題した都市環境デザイン・ワークショップが、琉球ブロック幹事である石嶺さんの司会で始まった。配られた一枚のペーパーには、書体も大きさも違ったキーワードが並んでいる。地元の方々の話しを聞きながら、それだけで「沖縄」を感じていた。

東北に生まれ育った私には、沖縄は今でも異国情緒を感じるところであり、キーワードは自然に沖縄をイメージさせるものが上げられている。太陽、風、月、星、光に始まり、空、海、・・、そして祈り、神、魂・・、芸、色・・と、それは「ちゅら」そのものである。そして、次へと目を移すとまち、道、スーチ小、人・・、さらに今、昔、未来、・・、観光、基地、交通、動と書かれている。

「沖縄らしさ」についての議論が展開されている時、地域性や景観性の違いは「方言」の違いと密接な関係にあり、自然・歴史・社会環境の違いが言葉・方言となり、風景となって表れてくると以前より考えていた私には、なぜか心地よく、新鮮な議論であった。ちょうど国交省が「美しい国づくり政策大綱」を発表し、景観基本法なるものを検討している時、キーワード「美ら・ちゅら」についての新城さんの話は、実に興味深く、彼の活動こそ都市環境デザインの大切な面を語っているように思えた。

翌日、東京への帰り際に新城さん達がつくった本「新！おきなわキーワード」を買って読んでみた、その内容は、時代の変化や人々の思いは都市景観や街並となって形に表れるだけでなく、言葉となって表れてくることを感じさせるものであり、なかなか楽しい内容である、今度15年前に出版された版と比較してみようと思っている。

さて、2日目のエクスカーションも実に楽しく、久しぶりの沖縄見学であった。私は、沖縄の20年の都市環境の変化は本土と変わらない開発の悪い影響が見られる。例えば、新都心として現在開発が進められている地域を見学したが、そこには沖縄を感じさせるものはなく、東京や大阪などの大都市の開発と大差ないというのが感想である。一方、モノレールからの景観の展開は、非常に新鮮であった。施設そのものは他のモノレールとほとんど同じようなつくりであるが、車中から見える景色の展開は、新たな那覇の街並や景観を発見できるものであった。新しい視点場としては魅力的であるが、見られる対象物としては魅力に欠けるというところだろうか。モノレール本体や構造物のデザインに何か物足りなさを感じ、地元でデザインできなかったのか残念であった。しかし、東南アジアで感じた光と海と自然がつくる環境の魅力、そして中国や韓国で感じた文化との関わりなどの良い側面を失っていない面も見られる。これは沖縄県人の意識の高さと土地への愛着の強さの表れか、歴史や伝統を見失わない努力と育成する努力の成果か、やはり「沖縄」を十分感じさせるものである。

石垣島で見た日本建築・民家を移築したつくった施設は、その土地の自然、社会、歴史環境と融合できず廃虚と化している姿は、時間の中で熟成されるものと、時間をかけて消滅していくものの違いを目の当たりに見る思いであった。植物や動物、つまり環境と共生している自然の姿に、都市環境を照らし合わせてみる必要を強く感じた。沖縄の環境で延び延びと育つ植物、いつも緑や花の絶えない気候風土、街路樹にしても、舗装材にしても異なってあたり前なはずである。つまり、違って当たり前の事、違わなければならないものが何かを確認し、大切にしていくことが「らしさ」に結びつくものと思う。

平成10年に当時の国土庁が作成した全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン」で国策の中で「美しさ」を打ち出したことは、大変驚きであり評価したいものであった。そこに示されていた“美しい庭園の島々”という表現を見た時、私は沖縄、琉球の島々を想像していた。昨年には美しい国づくり政策大綱が発表されたが、沖縄で言う「ちゅら・美ら」の本来の意味である「清ら」は、これから展開される都市部の開発や観光地の開発の中で大切にして欲しい言葉である。

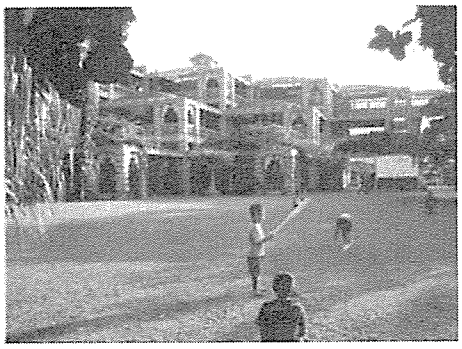
最後に「美しい庭園の島々」の手本となるような沖縄の都市環境デザインに期待しながら、琉球ブロックが今後発展されることをお祈りしたい。

特集

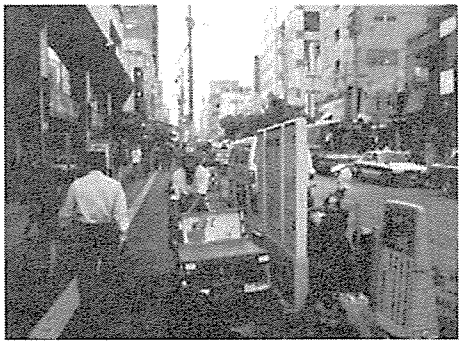
沖縄滞在記

柳田　良造
YANAGIDA　RYOUZOU
プラハアソシエイツ（株）

11月14日、8時30分のＡＮＡで千歳発、羽田で乗り換え、1時半那覇着。温度は半袖でもいいほど、小雪の混じる北海道からすると温度差20度、日本の広さを実感。レンタカーを借りて、高速道路に乗り名護へ。象設計集団デザインの名護市庁舎を訪ねる。北側にとられたアサギテラスの立体感のあるつらなりと芝生の庭での子供達の遊ぶ光景に、1970年代の地域や環境への思いを込めた建築の姿に感激、しばし佇む。



名護の街のゲートとなってきた「ひんぷんがじゅまる」をみた後、夕方、名護城跡へ登る。帰りは西海岸沿いを国道で戻る。ビーチに沿ったリゾートホテルがつらなる風景。嘉手納あたりから国道にびっしりの車の列、アメリカの大都市郊外の幹線を走っているような気分。那覇の街に入ると、完全に渋滞に巻き込まれ、ノロノロ運転。７時半過ぎに伺う約束をしていた石嶺さんに何度も、電話をいれ、「今どこですか」、「もうすこしかかりそうだ」などとやりとり。レンタカーの門限８時ぎりぎりにやっと戻れる。改めて沖縄は大変な車社会だと実感。モノレールから見る市街地の風景、敷地も駐車場が非常に多いようにみえる。特に中心部は駐車場の中に大型の建物がどかん、どかんと建つスタイル。モノレールの県庁前で降りて、那覇市役所前で、出迎えてくれた石嶺さんと会う。彼の事務所での明日のJUDI琉球の記念フォーラムの打ち合わせ会議に出席。初代の琉球ブロック幹事である石嶺さん、国建の福島さん、若いメンバーや女性もいらっしゃって、会議の熱気が雰囲気が伝わってくる。明日が楽しみ。会議の後の飲み会は、近くのしゃれたインテリアの居酒屋へ、まずオリオンビールで乾杯、続いて泡盛、楽しい話しが続く。ホテルに戻ったのは１時。11月15日、今日のＪＵＤＩのブロック幹事会は午後からなので、午前中は個人行動。10時半過ぎにタクシーで、ＮＰＯ法人前島アートセンターへ。場所は港に近い那覇の場末の飲屋街のなかの雑居ビルのなかにあるのだが、その活動ぶりは全国的に有名な現代アートの拠点である。今回訪れる理由は、「ワナキオ」という現代アートのイベントが行われ、その参加アーティストに札幌のりんたくアーティストの野上君が招待されていて、彼を慰問するのが目的。前島アートセンターはカフェとギャラリースペースを備えていて、ギャラリーでは赤瀬川源平や高梨豊などライカ同盟の写真展も開かれていて、なかなかの雰囲気。アートセンター代表の宮城さんに来訪の意を告げて、野上君を携帯に呼びだしてもらう。国際通りと市場の交叉するむつみ橋で出会う約束。久しぶりに会った野上君は、真っ黒に日焼けして元気そう。すっかり現地に溶け込んでいる感じで、とても北海道からやってきたようには見えない。半畳ほどのタタミの座席を前につけた新型のりんたくに乗せてもらって、アーケードの中を市場へ向かう。



会場となっているのは新天地市場。小学生達と那覇の美術大学の学生によるワークショップが古い市場の様々な場を活用して行われている。川にかかる橋の上での展示もある。なかなかいい感じ、「ワナキオ」の代表であるドイツ人アートディレクターを紹介してもらって、携帯電話で話す。もっと時間があれば、いろいろ見たり、もっと話してみたかったのだが、メイン行事のJUDIに会議が迫っているので、「残念ですが、またの機会に」といって失礼する。壺屋横町の美術館を覗いてから、アップダウンのある路地を歩いて、国際通りに戻る。沖縄は車社会になって、新しい市街地や区画整理を行ったエリアは、がらんとした通りの広がるたたずまいになったが、那覇の国際通りや壺屋横町、市場界隈には歩いて楽しい雑踏のたたずまいが残る。

「ワナキオ」の試みは街とアートをつなぐものらＪＵＤＩ全国ブロック幹事会、風通しのいい議論ができるようになってき

たことを実感。５時から琉球ブロック主催のワークショップ、沖縄から那覇市の都市計画にたずさわってこられた元部長さんや地域にこだわった出版を行っている若手の編集者、JUDIから関西ブロックの江川さん、関東ブロックの高見さん。石嶺さんのコーディネーターぶりがうまく、議論がおおいに白熱して、盛り上がる。そのなかに「沖縄らしさ」をめぐっての議論があった。江川さんは、言葉としてあっても実態としての沖縄らしさというようなものは示しようがなく、その場その場で、現場の環境に応答した魅力的で気持ちいい空間をつくりあげることしかできなくて、そういう場がつながり、連続していくことで、結果として「らしさ」のようなものがうまれたのではないかと。同感。７時から懇親会、４人組のアカペラコーラスに感激。沖縄の若者のリズム感は日本人じゃないなとびっくり。２次会は石嶺さん御用達の居酒屋、最後に八木さんの独唱があって、ここでも盛り上がる。12時半、ホテルに戻る。今回の沖縄訪問は、個人的には1972年の本土復帰の年の秋、はじめて行った時以来。あの時は鹿児島からのフェリーであった。大学2年目の教養から学部へ移行する前の秋休み、10月からスタートする建築学科での新しい生活に夢を輝かせていた時であった。あれから30年の時間が流れ、那覇の街も変わった。私の住む札幌も変わった。30年前に建築や都市の勉強を始めた私が、その後いろんな場所を旅し、いろんな都市や環境にかかわっていくことになるのだが、那覇はその歩みをはじめるのに訪れた最初の場所のひとつであったように思える。今回、JUDIの会議で沖縄に行かしていただいたのだが、琉球ブロックの誕生というエネルギーをJUDIがいただくことを実感する旅であったとともに、個人的にも、少々センチメンタルで感慨深い旅であった。明日は朝一番で、札幌へもどる。また北国での日常が始まる。

特集

琉球ブロックの誕生と

伊藤　登
NOBORU ITO
プランニングネットワーク

JUDIとして、沖縄をどのように位置付けるのかについては、JUDI設立以来の懸案事項であった。「沖縄は、九州ブロックに含まれるのではないか。しかし、九州ではかえって参加しにくいのでは」と、いった議論が長い間、JUDI内部で続けられてきたのである。ところが、一昨年の10月にJUDI有志数人が沖縄の都市環境デザインに関わる諸氏を尋ねたことがきっかけとなり、昨年７月の総会において琉球ブロックが誕生した。あっという間に長年の懸案事項のひとつが解決してしまった。人と人とが実際に交流する力が如何に強いものであるかを実感したできごとであった。そして、それから4ヵ月後の平成15年11月15日、琉球ブロックがホストとなり、全国ブロック幹事会の開催となった。

新しく会員になられた方の中には、全国ブロック幹事会の存在をご存知ない方も多いと思われるので、話が横道にそれるものの、ごく簡単に説明しておくことにする。JUDIの活動は、全国10の地方ブロックをベースとして行われている。その地方ブロックの幹事が一同に会し、それぞれのブロック活動の報告、地方ブロックや会全体の運営等についての協議を行う場が全国ブロック幹事会である。代表幹事会はその結果を参考に会の運営を行っているのだから、

JUDIにとってきわめて重要な会議のひとつといってよい。年に一度開催される全国ブロック幹事会は、すべてのブロックを10年かけて一回りすることになるのだが、その開催を契機として開催地となる地方ブロックがフォーラムやシンポジウム、視察等を主催している。

今回の全国ブロック幹事会の開催にあわせて、設立間もない琉球ブロックが打ったイベントが「ちゅらむん・びーち・ちゅらむん・めーさー　in Okinawa　都市環境デザイン・ワークショップ」である。ちゅらむん＝きれいなもの、びーち＝びいき、めーさー＝こびへつらう、という意味であると琉球ブロック幹事の石嶺氏から教わった。ワークショップの趣旨は、さまざまなキーワードから、「沖縄らしさ」を考えることにあった。

この「沖縄らしさ」というキーワードを聞いたときに、沖縄入りしてから会場に来るまでの間に感じたことがふと思い浮かんだ。久しぶりに訪れた那覇は、空港も新しく、モノレールも整備され、地方中核都市としての十分な都市機能を備えているように感じた反面、私が乗っているモノレールは、久茂地川を都市のエッジとして際立たせ、その両側の空間的な関係を断っているよう思えた。さらに不自然な曲線を描く国場川の水辺など、私はそれらに沖縄ならではの魅力を、実は感じ取ることができなかった、のである。

このような思いを抱きつつ、ワークショップに参加することになったのだが、地元で出版社を経営する新城氏の「サミットやＴＶドラマ「ちゅらさん」によって浸透した「沖縄らしさ」を外部から求められ、沖縄はそれに応えてしまっている。新しい町、埋め立てによるビーチの造成など、「ちゅら」と矛盾することはいっぱいある。」という発言に、内なる人と外部の人との意識の乖離がかなりあることを思い知らされた。多くの沖縄の人は、一体何を沖縄らしいと見ているのか、街のどのような場所、空間を好むのか、そしてそれはどのような理由によるのか、全国から参加したブロック幹事、地元の参加者の興味が尽きることはなかった。

実は、一月後の昨年末に再度、沖縄を訪れる機会に恵まれた。その際にも、「沖縄らしさ」について、多方面の地元の有識者の方々と大いに語りあった。私は北海道育ちで東京住まい。沖縄を訪ねたのは、恐らく３回目で、これが沖縄だ、などとと語れる筈もないのだが、議論を重ねるうちにひとつふたつ分かってきたことがあった。「沖縄らしさ」をひもとく鍵のいくつかは、微地形の活かし方や伝統的な家づくり、集落形成（まちづくり）、まちづかいの約束事、風景認識や空間認識の約束事にあるように思われたのである。

その会議の場では、「古いものにしがみつかず、これからどうするかが大切ではないか」と、いう意見もあった。沖縄は、外部が押し付けたイメージと、自分たちが抱く、あるいはそうありたいと願うイメージとの狭間で揺れているようだ。

「沖縄らしさ」の押し付けから脱却し、沖縄の人が心から受け入れられる沖縄ならではのものをどのようにしたら勝ち取ることができるのか。これはとても大きく、かつ重要なテーマである。折りしも、今年度のJUDI公募制プロジェクトが先の代表幹事会で２件選定された。ひとつは、東北ブロック、もうひとつは琉球ブロックである。琉球ブロックのテーマは、『「琉球の美を探る」　―　伝統の技からその美を考えるその1』。研究企画書には、「沖縄らしさを追求する上で課題となるのは、琉球王国時代に培われた伝統に裏打ちされた「美」に対する様式やその背景となる異文化の融合の作法、根幹を形成するであろうスピリチュアルな部分等の構造を先ずは解き明かす必要があること。・・・」と、ある。

この研究によって、真の「沖縄らしさ」が明らかにされることを期待して止まない。さらに、これらの琉球ブロックの活動が設立13年目を迎えた都市環境デザイン会議全体の活動に大きな刺激を与えることを願っている。

JUDI連載コラム

「スパイシースペース」都心に展開される屋上緑化

山本　忠順
YAMAMOTO　TADAYUKI
ランドスケープアーキテクト

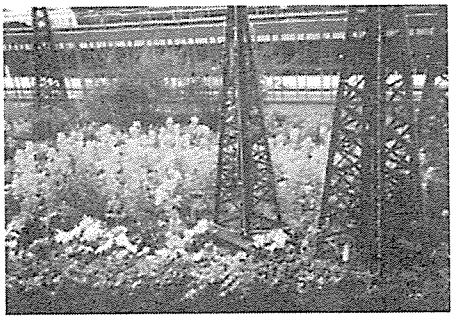
東京交通会館の３階の屋上ガーデンは、自由に人が入ることができ、四季を通じて彩り豊かな花や緑を楽しめる。またレストランからも眺めることができるので、すでに有名なスポットとなっている。ところで同ビルの13階もガーデニングされているのをご存知だろうか。

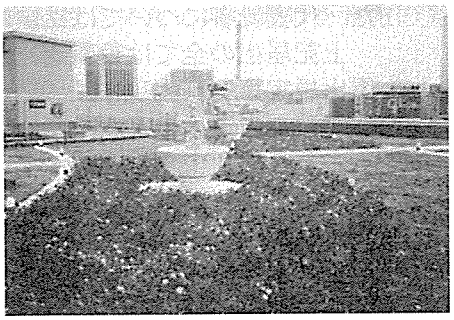
また、昨年竣工した丸ビルは、オープン以降大勢の客が殺到し、マスコミを賑わせているが、その低層部の屋上が緑化されていることを知っている人は、おそらく少数であろう。

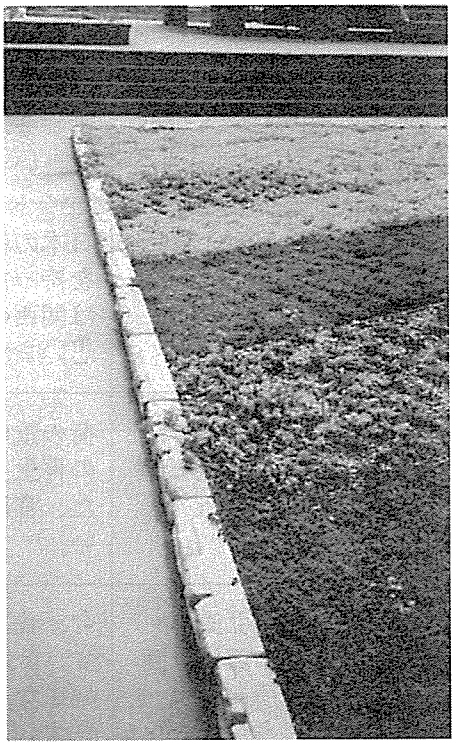
東京駅を中心に、大手町・丸の内・有楽町と八重洲を含めたこの地区には、再開発プロジェクトが目白押しである。それら新規のビルの屋上には、積極的に緑化が施されており、さらにそれが既存のビルへと、面的な拡大が推進されている。しかも具体化したものは、皆しっかりと管理されていて美しい。

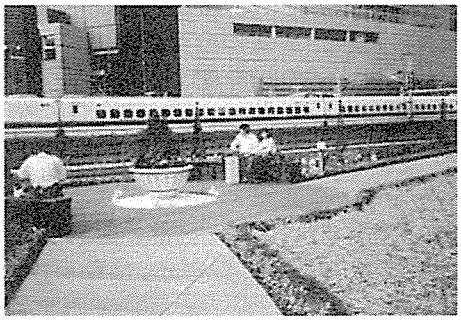
ビルで働く人々を癒す効果はもとより、この東京を代表する地区での、オアシス空間ネットワーク実現の意義の大きさは計り知れない。

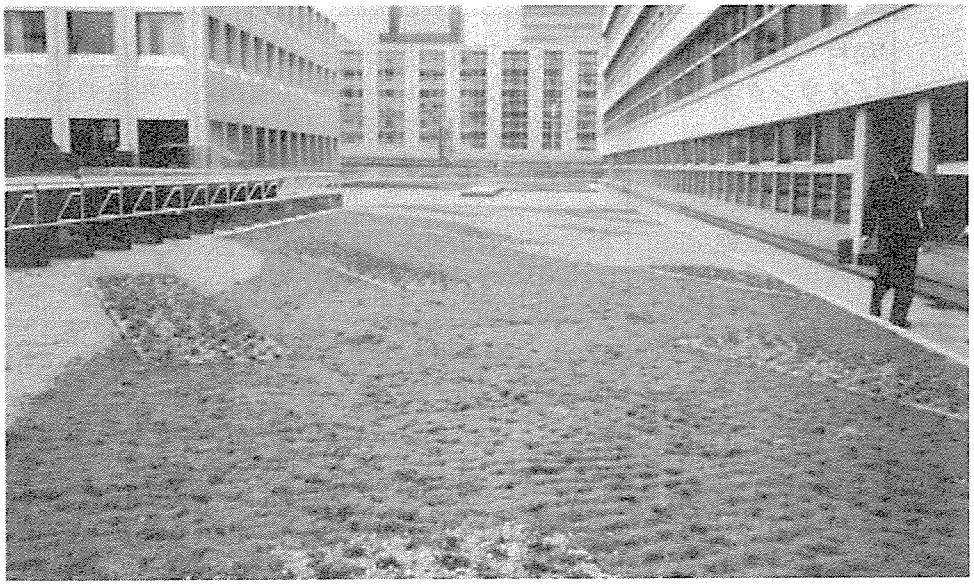
さて、東京交通会館の屋上ガーデンでくつろいでいると、目の前を新幹線が通り過ぎてゆく。つまり逆に新幹線の窓越しに、この緑を眺めることができるということである。是非今度お試しいただきたい。











■選挙管理委員会　役員選挙結果報告

伊藤　　洋
ITOH YO
選挙管理委員会委員長

2004年2月18日に告示しました標記選挙の候補者届出の受理は、2002年3月3日午後6時に締め切りました。代表幹事については立候補者４名、推薦候補者６名、監査役については立候補者2名でした。

上記届出の全ては役員選出規定、同細則に照らして有効であることを確認しました。その結果、役員選出規定第9条第2項に基づき、全員が当選人として選出されました。

なお、当選人は2004年7月に予定されている第14期定例総会における承認によって、正式に選任されることとなります。

■代表幹事当選人氏名

／所属及び所信	
服部　圭郎 ／明治学院大学経済学科	グローバルな視点を有しつつ、その地域ごとのアイデンティティを発露させる都市デザインを具体化することに貢献できるような情報提供、国際交流を進めていきたいと考えます。
堀口　浩司 ／㈱地域計画建築研究所	日本の都市環境の向上、デザイナーの地位確立に向けて、JUDIの活動は大変意味を持っています。これまで関西ブロックを中心に活動してきましたが、これからは関西のみならず、日本の都市環境デザインの向上のため、頑張って行きたいと思います。
横川　昇二 ／㈱横川環境デザイン事務所	荷の重い代表幹事の任ですが、推薦を受けましたので、「美しい景観」と「地域の再生」を念頭に置き、本会の会員のさまざまな専門性や業種の多様さを活かした、官民あるいは産官学の枠を超えた新たな活動の活性化に微力ですが努力したい。
長谷川　弘直 ／㈱都市環境計画研究所	今、我々職能人は様々な要望と期待のなかで、都市、まちづくりに関わっています。参画、協同、コラボレーションは、実践する手法として最も重要といえます。幅広なJUDIの皆さんと協同しながら、活動を内外へ発信して行きたいと考えています。
松村　みち子 ／タウンクリエイター	推薦され正直戸惑っていますが、私の活動のうち、中部地域を舞台にしているものが１／３くらいもあり、確かに切り離すことのできない地域であることは否定できません。ある意味、堅実な土地柄でもあり、いろいろな可能性が眠っているとも感じています。
重山　陽一郎 ／高知工科大学	微力ながらJUDIの発展に力を尽くしたいと考えます。
柳田　良造 ／プラハアソシエイツ㈱	JUDIの社会的意義をさらに高めるため、会の運営を活気づけるよう、がんばりたいと思います。

杉山　朗子 ／㈱日本カラーデザイン研究所	様々な分野の方々が参加しているJUDIの活動及び意義が、さらに多くの方々に広く伝わるような活動を目指したいと考えております。
中井川　正道 ／ＦＩＴ環境デザイン研究所	役不足とは思いますが、都市環境デザイン会議活性化のために、努力させていただきたいと考えています。特に、地方ブロック活性化のための組織のあり方の見直しと、JUDI賞の内容等の再構築について検討します。
鳥越　けい子 ／聖心女子大学教育学科	過去２年間（第１期）の代表幹事の経験を生かして、JUDIの今後に資する運営方針をJUDIというグループ組織の社会への貢献と、会員への貢献の両面から考えていきたいと思います。

■監査役当選人氏名

／所属及び所信	
井口　勝文 ／京都造形芸術大学	JUDIの活動と存在の意義は益々重要であり、社会で果たす役割も認知されるところとなってきました。会員皆様の活動に敬意をはらい、活動の一助になり度いと存じます。
八木　健一 ／八木造景研究室	関東ブロック幹事、代表幹事時代の経験を生かし、今後とも本会の健全で活発な活動のために尽力いたします。

委員会活動報告

■研修研究委員会報告

松本　篤
MATSUMOTO ATSUSHI

アトリエ HOR

第６回押しかけセミナー　報告

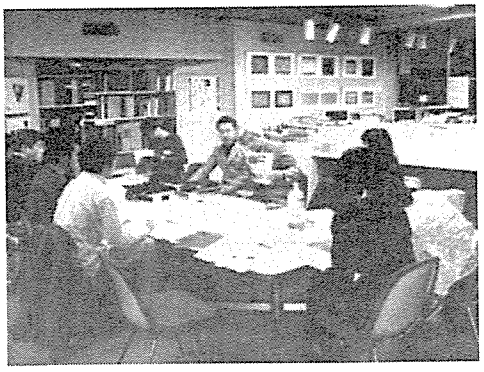
押しかけセミナー第6回は、幅広く環境色彩計画に取り組まれている吉田慎悟先生を、カラープランニングセンター（ＣＰＣ）に訪ね、10名の参加者を得て3月5日(金)に開催されました。デザインや設計の分野での色彩の扱われ方の変遷から、最新の、環境と色彩の関わりまで、時にはサンプルや色票に、動きや光の変化まで加えた視覚体験をまじえ、ＣＰＣの田邉氏の解説も加えてセミナーが進められました。

1968年に、デザイナーと企業、大学を結ぶ、色彩情報の拠点として開設されたＣＰＣは、当初啓蒙的な役割も担いながら、各界の著名なデザイナーが関わり、さまざまな企画を展開した。その成果は、100号まで続けられた「色彩情報」誌に詳しいが、その時代の流れに呼応するような、工場機械のアイレストグリーンに象徴される機能主義的なカラーコンディショニング、それと入れ替わるように登場したスーパーグラフィックの急速な展開とオイルショックによる衰退、ＣＩに関連した色彩計画などの状況が説明されました。70年代、ＣＰＣの海外理事であり、吉田先生も在籍されたジャン･フィリップ･ランクロの事務所では、色彩と建築のかかわりを、地域に根差した色彩という観点から問うことを始め、まち並みの色彩調査の手法を開発していった。日本でも都市や地域のまち並み調査に色彩調査が加えられる機会が増え、測定技術や機器の整備と相まって色相(Hue)、明度(Value)、彩度(Chorma)による客観的な分析と計画手法が蓄積されてきた。こうした成果は、80年代に多く制定される景観条例に取り入れられることになるが、その代表的な例として、数年に渡る環境色彩調査をもとにしてまとめられた兵庫県景観条例の色彩指導基準について話されました。ここでは「周辺に調和する色彩を選ぶ」といった曖昧な規定から踏み込んで、大規模建築物に関するネガティブチェック的な規制と、景観形成地区での地域固有の色彩を守り育てる計画手法に関して、数値化された基準が策定されたこと、そして、リキテックスによるオリジナルの色票作成の苦労や屋根、壁の面積的対比の扱い、日本固有の、素材と色彩の結びつきの事情や自然界の色彩との関係など、数多くのエピソードもまじえて伺えました。

さらに、この10数年における景観形成基準の中での色彩計画を俯瞰して、1.ネガティブチェック　2.望ましい色彩の提示　3.積極的な誘導としてのアドバイザー制度と３段階の流れが考えられること、まち並みという連続性の中では隣り合う建物の「色差」－関係性が重要な要素であること、素材感が重きを占める日本では例えば「斑(むら)」を活かした色彩計画が課題であることなどが述べられました。

参加者からは、民間や海外での都市開発での色彩計画の取組み、色温度や錯視、流行色や伝統色、視覚の特性などと色彩計画との関係に、あるいは新たな基準による分析や基準作りの可能性などについてさまざまな質疑がなされました。そうした中で、色彩は、まちづくり、環境計画のなかで比較的横断的で多くの人がイメージしやすい内容であることから、市民参加の手がかりとしても有効であることなどが話題となりました。

研修･研究委員会が企画する押しかけリレーセミナーは、いよいよあと1回、6月に予定されている林泰義先生の＜『新しい公共』とまちのデザイン＞を残すのみとなりました。改めてご案内いたしますので是非積極的にこのセミナーをご活用ください。



事務局より

1．新会員の紹介

2003年11月1日～12月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

12月31日現在の会員数は、486名です。

正会員氏名	勤　務　先（ﾌﾞﾛｯｸ）
福島　清	(株)国建（沖縄）
大嶺　亮	ファイブディメンジョン（沖縄）
木下能里子	(株)なむ環境創造（沖縄）
大丸　英博	富山国際職藝学院（北陸）
丸岡彦太郎	(有)丸岡樹仙堂（北陸）
町田　瑞穂	(株)アイシーワークス（関東）
西海　哲哉	(株)曽根幸一環境設計研究所(関東)

2．住所変更等（敬称略）

氏　名	変　更　内　容（新）
嶌田　真一	豊島区役所 〒170-8422 豊島区東池袋1-18-1 Tel. 03-3981-4879　Fax. 3981-1008
外園　勝	(有)Soto設景室 〒520-0502 滋賀県滋賀郡志賀町南小松1594-177　Tel. 077-596-8338
山本　勝也	(株)ダンケジャパン 〒108-0074　港区高輪2-16-3　ダンケ高輪ビル　Tel. 03-5447-6840

編集後記

今回の沖縄は20年ぶりだった。初めて、沖縄を訪問した時のむせるような暑さと太陽のまぶしさ、フルーツやアイスクリームのおいしさは、今でも私の沖縄のイメージとして残っている。しかし、当時は観光客として金魚鉢の中から外を眺めているようで、沖縄を肌で感じることはなかった。「沖縄らしさ」がフォーラムのテーマだったが、米軍基地の存在は景観面だけでなく、経済面や精神面など地元の人々にさまざまな影響を与えてきたのだと今さらながら実感した。本土と沖縄との構図はやはり現地の人と話してみないとわからない。「沖縄らしさ」とは何かは、沖縄の歴史文化を理解せずには語れない。

琉球王国はまさに外部からの侵略と恭順の歴史であったという。外部への迎合や外部文化を取り入れ、結果的に独自の文化を生み出してきた歴史があったのだと知らされると「沖縄らしさ」は、どんどん変わっていくのが当然であり、その時代、人によって多様な見方があり特定できないのではと思った。

一方、経済面や技術面で東京との結びつきが強く、沖縄も本土と同じように画一的な市街地整備が進むなど、以前の沖縄らしさがどんどん無くなっているという。「沖縄の新しいブロック名がなぜ、沖縄でなく琉球なのだ」という解答がこのあたりにもあるような気がした。

今までは、駆け足で殆ど地元の人と接する機会はなかったが、今回はフォーラム、懇親会と生の交流を通じて大変貴重な体験ができた。次回はじっくり、沖縄の自然や人々の暮らしを考えてみたいと思う。

（河本一行　シェラプラン）

５年毎に訪問する沖縄は、時々自分の町と見分けがつかない風景も増えているもののどんどん、“らしく”なっていく。今回の沖縄では、街のどこかしこには、“ちゅら”“ちゅら”と、いう文字が目に入った。そうだ“ちゅらさんだ。”と街を歩きながら沖縄らしさに納得する。さらに、このところ、沖縄の人たちの活躍がめまぐるしく、“沖縄の歌”、“沖縄のおばあ”“沖縄の食べ物”等に懐かしさやいい知れぬ優しさを感じる。美しい海、美しい人の心が、沖縄なのだ沖縄らしさだと一言で縛って思い込む。

今回のフォーラムでこの“らしさ”の問題がフォーラムを多いに盛り上げていた。特に印象深かったのは、外から見た沖縄らしさが、本来の沖縄らしさだと沖縄の人たちが思うことを遺憾に思うという発言と、“らしさ”等決める必要がないという発言だった。

地域の人たちと“まちづくり”に汗しているとこの“らしさ”の問題に良く突き当たる。突き詰めていくと１００人いれば１００人違う。そう実感している。全くこのらしさの話を出さずにワイワイガヤガヤ言ってしまうとなんだか恐ろしいことになってしまうのも時々感じる。私の中では、一度、真剣に考えてみて突き詰めない。これに限るのだと私は考えている。可能性はいつでも無限にある方がいい。そんなことを改めて感じた沖縄でした。

（横山あおい　エイライン）

広報・出版委員会

澤木　俊冏	石崎　　均
土田　　旭	伊藤　光造
近田　玲子	加茂みどり
菅　　孝能	河本　一行
中嶋　猛夫	森川　　稔
櫻井　　淳	横山あおい
松村みち子	吉田　愼悟
白濱　　力	作山　　康